

## 盲児とともにもに

浅井徳子

白杖をもった盲人に、行きずりの人として出会ったことはあつても、盲幼児との出会いは全く初めての経験だった。何もわからないまま、盲学校幼稚園に勤務することとなったのは、昨年四月からである。

現在五歳男児一名、四歳男児二名が通学して来ているが、その視力障害の原因は、昨今でも問題になっている未熟児網膜症である。

椅子に腰掛け、机に顔をうつ伏しているこの子どもたちに出会った時、果たして保育器の中で育てられ、生命をとりとめるのが、この子たちの幸せであつたらうかと、生命の尊厳さえ疑いたくなつたのだつた。

しかし、それは私の早計な考えであつたことが、子どもたちと生活を共にして、悟らされた。一つまた一つと遊びを覚え、自由に遊べるようになってきた子どもたちの、何と生き生きとしてきたことだろう。

五歳児Kちゃんは、一年間普通幼稚園で保育を受けて来ているが、人が近付くと、ぶつ、蹴る、髪の毛を引っ張るといふありさまで、何ものをも拒否し、言葉もほとんどしゃべらず、じつと机に顔を伏せていたり、床にうずくまっていた、たまに動きまわれば、手の届く所にあるものは皆投げ、手で折れるものは折つてこわしてしまふという子だった。自閉的傾向が強く、友だちからの働きかけには全く応じなかつた。しかし、音楽は好きで、ピアノをひいてもらう楽しみを知つてから、次々とやりたい遊びが増え、一学期の終業式の時には、式の間、ずっと「先生、きょうプールにはいれるの」「先生、お山登る」等と、やりたいことを言い続けていた。まだ幼い友だちの髪をひっぱることだけは、ひっぱられた子どもが大声をあげて反応するためだろうか、やめなかつたが、自発的に行動する喜びを知つたせいか、性格が明るくなり、ぶつたり蹴つたり物を投げたりしなくなつた。

母親の話では、異状行動が起り始めたのは三歳位のころからと

のことだが、初めて生まれた子どもが盲児となり、更に他人に危害を及ぼすようになった時の親の気持ちはどんなであったろう。育て方もわからないまま、気の休まる時もなかったのではないだろうか。

四歳児Mちゃんは、手足に少々麻痺があり、二歳過ぎまで歩けなかった上、年寄りっ子にありがちなように、口は達者であるが、積極的な行動力に欠け、手を使うこともきらいで、友だちとうまく付き合えず、手をつながせようとしただけで泣きだしてしまいうような子だった。

六月初め、運動場の向側までつみ草に行った翌日、またつみ草に行きたいと言うので、運動場がいているのを幸い、一人歩きをさせてみた。音源もなしで、「こっち向いて真直ぐ」と言っただけで歩かせると、九十度以上も曲がってしまい、何回やっても目的の方向へ行けなかった。しかし、一人で歩けることに喜びを感じたのか、それ以来、登校すると「お散歩するの」と一人でどこまでも歩いて行き、植込の中も何のその、塀に突き当たるまで歩いて行ってしまふようになった。晴眼児なら歩き初めてすぐ知ったであろう一人歩きの楽しさを、おくればせながら知ったMちゃんの行動力は急速にのび、母親も積極的に育児にとり組むようになり、まっすぐに歩くことも、夏休み中には、走ることもできる

ようになり、手をつないで歩いて、ちょっと軽くふれる程度で、自分の力でどんどん歩けるようになった。そしてすべての面に自信を持ち、意欲的生活態度は、見ているも生きる喜びを感じさせられるほどである。

人間が、行きたい所へ自由に行くことができるということが、どんなにすばらしいことであるかを教えられた感じだ。

四歳児Tちゃんは、少々気が弱く、照れやさんだが、左眼視力が〇・〇二(右光覚)ほどあることも手伝ってか、なかなか活発なはずらっ子である。身辺自立も一応でき、友だちを求める気持ちは強いので、たった三名の幼稚部にいるよりも、普通児の中で集団生活を楽しむことができたならと考えたが、どの園でも園児数が多く、なかなか転園はむずかしい。

特殊学校では、子どもの人数が少く、個人指導は容易であるが、集団生活を経験するという点では問題が残る。何とかこの点を補うため、普通幼稚園へ連れて行ってやりたいと考えていたところ、〇幼稚園のご好意により、近く時々遊びに行かせていただけることになった。この子どもたちが、大勢の友だちを得て、更に成長することを願っている。

三人の盲幼児と生活はじめて、三人が三様の大きな問題をか

かえているのを見るにつけ、障害を持った幼児の教育的環境が整えられるには、いまだしの感を深くせざるを得ない。

現在、東京都では、心身障害者福祉センターで、盲幼児の教育を行っている。しかし、職員の人員が少く、週一回の機能訓練が精一杯という実情であるという。わが子が盲児となり、奈落の底に突き落とされたような気持ちの両親が、安心してわが子を育てることができるような条件をつくるためには、もっときめこまかい教育が必要なのではないだろうか。

本校でも、現在一年保育しか認められていない。今年は人員に余裕があったので、四歳児も入学しているが、制度として三歳児から保育を受けられるようになってほしいものだ。しかし、将来の社会生活まで広く眼を向けてみれば、障害児が特別の施設で隔離されて保育を受ける状態が、障害児のためにも、普通児のためにも自然な状態ではないのではないだろうか。本校では、普通児と共に保育する方法をいろいろ考えている。また、盲児を受入れて保育している普通園もその数を増して来ている。一応の身辺自立と社会性を身につけた幼児は、普通児と共に保育を受ける機会を与えたなら、その生活はもっと充実したものになるのではないだろうか。

しかし、障害の程度も、それまでの育てられ方も異なり、それ

ぞれの子どもに適した教育をと考えれば一概には言えないだろう。問題はむしろ、半年ばかりの経験で云々できることではないが、この子どもたちと過ごしてみても、体に一つ位障害があるということが、子どもとして変わったものではなく、特別扱いするものでもない一つの性質に過ぎないという思いを強く持った。そして、子どもたちは体中で訴えている。

「ほくちちだつて幸せに生きる権利があるんだ。この世の中でやりたいことがいっぱいあるんだ。生きていてよかったです」

自分の力でできることがいっぱいあるんだ。生きていてよかったです。

今、私は眼の見えないことに優位性さえもあることを感じている。見えないためにとらわれることなく自由に表わす創造力。自分で考えだした危険防止の方法。幼児と保育者との深い結びつきと全面的な信頼関係等、見えること以上に強い力があることを教えてくれたのは、この子どもたちである。

これからも、この子どもたちとともにある日々を大切にしていきたい。

(東京教育大学附属盲学校幼稚部)